（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　　海老根　剛

本論文は、ヴァイマル共和国時代（1919-1933）のドイツにおける広義の「群集」をめぐるさまざまな言説を、文学作品にとどまらず他分野の文献を含めてとりあげて、その特徴と変遷を、言説分析として論じたものである。

そもそも英語で crowd ないし mass、ドイツ語で Menge ないし Masse と、言語によって微妙な差異をはらむ概念群は、特定の時間と場所に偶然に居合わせている「群衆」から、一定の情念、志向を共有しつつ展開していく「群集」へ、さらには時間、場所の拘束を離れて、メディアによって媒介される「大衆」ないし「公衆」にいたるまで、さまざまな意味内容を含んでいるが、筆者は、こうした多義性に注目し、またそれをあえて利用しつつ、すくなからぬ「群集」論の比較対照を、時代を追って試みている。最初に筆者は、ヴァイマル期以前に遡り、ドイツにおける「群集」論の成立に、フランスの、なかんずくル・ボンとタルドの、それぞれ先駆的な論述が影響を与えていることを指摘する。この文脈で把握されるのは、ジンメル、カウツキー、シュペングラー、なかんずくフロイトである。ル・ボンの著作はフランス革命の経験に発しており、こうした論述は、「群集」に対して多くは批判的、否定的な姿勢をとっている。それに比して、第一次大戦が終結してのち、レーテ共和国の成立と瓦解をめぐる社会的混乱の時期に、ガイガー、ティリヒ、フェーダーンによって展開された議論は、「革命的・忘我的群集」に積極的な意味を認めるものであった。しかし、1924 年以降、相対的安定期に移行するにつれて、たとえばプレスナーのように、「交通」のカテゴリーによって記述されるところの、「合理的・機能的大衆」論が優勢になる。そして最後に、ナチスの権力掌握に先だって、エルンスト・ユンガーによる「労働世界」の構想があらわれるが、筆者は、これをヴァイマル共和国時代におけるそれまでの「群集」論を解体し、最終的に解決しようとする試みとして理解している。

このような群集・大衆論の変遷を背景に筆者は、トーマス・マン、ゲオルク・カイザー、エルンスト・トラー、イルムガルト・コイン、ヘルマン・ブロッホなどの小説、戯曲の精緻な解釈を提示し、同時代の諸言説との一致と差異、また文学作品に見られる先駆性を指摘しつつ、それらの作品に斬新な視角から光を当てる。群集・大衆をめぐる議論は枚挙にいとまがないが、複数の分野を横断しつつこれほど総合的に所説を展開した上で、その言説史の中に文学作品を位置付けた論文は、ドイツ語圏においても例をみない。

本論文は、あえて学際的たらんとする構想に起因する形式的な不整合がごく一部にみられるとはいえ、論旨はきわめて明晰であり、参考文献を博捜しつつ、少なからぬ量の群集・大衆をめぐる言説を再現し、比較し、論究した力量は、十分に評価されるべきものである。以上に鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。